

説教 「神の栄光に生きる」

(イザヤ書 45 章 1-7 節 ヨハネによる福音書 17 章 1-13 節)

2022 年 5 月 29 日 主日礼拝

日本基督教団仙川教会

大串肇牧師

イエスは十字架におつきになる直前、弟子たちに様々な教えをお語りになりました。それがいわゆる告別説教と呼ばれている箇所です。ヨハネ福音書 14-16 章の中に記されています。その説教の結びがイエスご自身の祈りです。その個所をわたしたちはご一緒にお読み致しました。確かにイエスご自身祈られた箇所は前にも出てまいりました(11 章 41-42 節、12 章 27-28 節参照)。しかしこれほど長く、内容に富んだものは他の福音書を含めて皆無です。

イエスは今や十字架に付き、この地上を去ります。しかしそれで悲しい最後でも終わりではないのです。この第 4 福音書にとって、イエスの十字架は、同時に復活・昇天の出来事です。こうして地上に派遣された神の子イエスのご使命が全うされ、救いの御業が完成されることを意味します。こうして神に栄光を帰するのです。

「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。」 (1 節)

「父よ」という祈りの呼びかけは、マルコ福音書 14 章 36 節に記されたあの、ゲッセマネの園の祈りを髣髴させます。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」と、イエスは祈られました。

イエスにとりまして十字架は苦しみであり、過酷な試練でありました。この祈りにはまことの人となりたもうイエスご自身の苦悩がにじみ出ています。他方、このヨハネ福音書では御子が神の栄光を現す時なのです。イエスはその御業のために地上に遣わされ、肉をまとった神の子であり、父とともに天地創造される以前から永遠に存在した存在です。このことを語ったのはヨハネによる福音書 1 章です。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。(1-3 節)

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた (14 節)。

1章はキリスト（ロゴス）「賛歌」です。17章はキリストの「祈り」です。イエスのご生涯はいわば賛美に始まって祈りで終わる。イエスのご生涯はいわばひとつの礼拝のようです。

キリストの生涯を通じてヨハネの主題は貫かれているといえます。つまり、礼拝なのです。ほんとうに神を拝むとは自分の栄光を追求したり、他者を支配したり、神のように偉くなることではないのです。そうではなく、徹頭徹尾神に栄光を帰する生き方です。神のみ言葉に心の耳を傾けしたがって育です。そのためにイエスはさまざまな教えを語り、様々な業をなされました。そして最後に父に祈るのです。それが1-5節です。その後半をご覧ください。

この祈りは2つの要素からなります。

弁明： 「わたしは、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」（4節）

祈り： 「父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。」（5節）。

弁明： 「わたし（＝イエス）は御名を現しました」（6節）。

祈り： 「聖なる父よ、……彼らを守ってください。」（11節）

先ず祈りの最初のところで、イエスのご生涯を通して自分のなしたことを一言で言い表しました。それは御言葉を通して神が誰なのか示しました。その結果、弟子たちはまさにその「御言葉を守り」（6節）、イエスこそ「みもとから出て来たことを本当に知り」、父なる神が主イエスを「お遣わしになったことを信じた」のです（8節）。

そして第二部で、イエスは今地上を去るゆえに、地上に残る彼らを守ってくださるよう祈るのです。イエスの祈りは弟子たちに向けられました。しかし、主イエスの祈りはこの祈られた弟子たちが主イエスの十字架と復活後に伝道し、新しい主の弟子となるすべての人々に拡大されています（20節）。

わたしたちのために、今も尚イエスは父なる神に執り成してくださり、わたしたちを罪から解放し、この世の悪の力から守ってくださるのです。イエスこそ、神の栄光に生きる方でした。わたしたちもまたそのイエスの御言葉に生きる者になりたいのです。自分の栄光を追求するのではなく、ただ神の栄光に帰する者となるようになりたいと祈り願います。ご一緒に祈りましょう。